

日本語のかき混ぜ操作 — 談話構造の観点から —

Scrambling in Japanese: Discourse Structure Perspectives

三原 健一*
MIHARA Ken-ichi

1. はじめに

日本語では、基本語順を取る下記の (1a) から、かき混ぜ (scrambling) と呼ばれる操作によって要素を文頭に前置した (1b, c) が可能であり、前置されている要素が受ける強調的意味合いの差はあるが、(1a-c) のいずれも基本的意味は異ならない。¹ また、(1d) のように、複数の要素を文頭に前置することも可能である (以下、他文献から引用する文例を含め、かき混ぜ操作の適用を受けた句 (以下、「かき混ぜ句」) の後に「,」を入れて示す)。²

- (1) a. 喫茶店の主人が元町商店街で犯人らしき男を見たそうだ。
 b. 元町商店街で、喫茶店の主人が犯人らしき男を見たそうだ。
 c. 犯人らしき男を、喫茶店の主人が元町商店街で見たそうだ。
 d. 元町商店街で、犯人らしき男を、喫茶店の主人が見たそうだ。

日本語生成文法において、かき混ぜ操作文の研究は 1970 年代に始まり、Saito (1985, 1989, 1992) の重要な研究以降は特に、夥しい数の提案なされてきた。それらの研究の多くは、かき混ぜ句が着地する位置の特質、かき混ぜ句とその痕跡が演算子・変項関係をなさないこと、かき混ぜ句に後続する代名詞や照応形の振る舞い、等々といった点に集中していた。すなわち、文法 (sentence grammar) の観点からの分析に特化していたと言えよう。生成文法の研究目標の 1 つは、文の統語派生のメカニズムを明らかにすることにあり、統語派生で作り出される構

* 京都ノートルダム女子大学・客員教授

¹ 最終稿を作成するにあたって、2 名の査読者の方々からのコメントが非常に参考になった。ここに記して謝意を表したい。コメントの多くはデータの文法性判断に関するもので、様々な要因が関与する談話データの扱いの難しさを感じると共に、実例で綿密に検証する必要性も感じた。本稿でも、第 6 節で実例を 4 例挙げたのだが、量的に極めて不十分である。さらに研鑽を積みたい。

² かき混ぜ操作には (ia-c) の 3 つのタイプがある (「t」はかき混ぜ句の痕跡を示す)。

- (i) a. [_S 手紙を, [_S 太郎は花子に t 送った]] (単距離かき混ぜ)
 b. [_S 手紙を, [_S 次郎は [_S 太郎が花子に t 送った] と言った]] (長距離かき混ぜ)
 c. [_S 太郎は [_{VP} 手紙を, [_{VP} 花子に t 送った]]] (動詞句内かき混ぜ)

このうち、本稿で主として議論の対象とするのは、(ia) の単距離かき混ぜ操作 (単文頭にかき混ぜ句を配するタイプ) であるが、第 3 節で島の制約に言及する際に、(ib) の長距離かき混ぜ操作 (従属節内から主節頭にかき混ぜるタイプ) も多少考察の対象とする。

造は「文 (sentence)」である。従って、文文法の観点からの分析に特化していたのは、いわば必然であったと言えよう。

しかし、基本語順を変えて要素を文頭に配置する規則には、そうしなければならない理由がある筈である。直ちに思い付くのは、先行談話中に現れている要素を、何らかの際立ちを持たせるために後続文の文頭に置くという方策である。しかしながら、これまでの日本語生成文法の文献において、かき混ぜ操作と談話構造の関連に言及した論考は、もしあったとしても極めて少ないであろう。本稿では以下、「語順を変更する規則には必ず談話法上の理由がある」というテーゼを通奏低音として、かき混ぜ操作と談話構造の絡みを浮き彫りにしたい。³ただ、急いで付け加えれば、筆者には、生成文法でのかき混ぜ操作に関するこれまでの研究成果を否定する意図は全くない。それらの知見に談話構造の検証から得られるものを加えることによって、かき混ぜ操作文が、より俯瞰的に理解され得るであろうことを示したいだけである。⁴

2. 焦点と談話主題

かき混ぜ操作には、談話的振る舞いに関して2つのタイプがある (三原 2022)。1つ目は先行談話での Wh 句に解答を与えるタイプで、2つ目は先行談話で設定された話題を引き継ぐタイプである (以下、例文中での「A」「B」は話者を示す)。

(2) a. 先行談話での Wh 句に解答を与えるタイプ

A: 大輔はどのグループを応援してるんだろう?

B: AKB を、あいつ、応援してる。

b. 先行談話で設定された談話主題を引き継ぐタイプ

A: 知宏って、アイドル好きだよね?

B: (うん,) AKB を、あいつ、応援してる。

(2aB) でのかき混ぜ句は、A の「どのグループ」に対して解答を与えたものである。それに対して (2bB) でのかき混ぜ句は、A の発話において話題として設定された「アイドル」を引き継いで、その話題と関連する AKB について述べたものである。ここにおいて、(2aB) でのかき混ぜ句は焦点 (focus) として機能し、(2bB) でのかき混ぜ句は談話主題 (discourse topic) として機能している。

³ 日本語において語順を変更する典型的な構文としては、(ia) の後置文や、(ib) の分裂文などがある。

(i) a. それか、ほんとに来たんだよ、照美が、夜中に。

b. ドアが開いて現れたのは、なんと、保安官その人だった。

これらの構文については別稿 (三原 forthcoming) で論じる。

⁴ 「談話 (discourse)」を厳密に定義するのは一筋縄ではいかないが、本稿では、単純に「2つ以上の文からなる文連鎖」と定義しておく。この定義は、しかし、故のないものではなく、談話分析の領域においても (例えば、Schegloff and Saks 1973)、最も基本的な単位とみなされているのは「隣接対 (adjacent pair)」である。

焦点とは、談話の中で設定された「問い」に対する「答え」となるもので (cf. 天野 1998), 問いの中にある変項 X に値を与えたものである。このとき, X は, それ以外のメンバーを排除する形で選択される。(2a) であれば, 「どのグループ」が想起させる対照セットの中から, X (AKB) が選択される訳である。他方, 談話主題とは, X に対する「説明課題」(X はどのようなものか) を設定し, X に対する「題述 (comment)」を述べるものである (cf. 堀川 2012, また註 5 も参照)。

É. Kiss (1998) は, 焦点には 2 種類のものがあるとしている。1 つ目は単に前提とされていないという意味での焦点であり, 情報焦点 (information focus) と呼ばれる。日本語の基本語順を取る文において, 動詞の直前に来る要素は典型的な情報焦点であり (いわゆる「動詞直前焦点」), これには, 焦点となる X 以外の要素を積極的に排除する職能はない。そして 2 つ目は, 焦点句によって対象が「言い尽くされている」もの, すなわち, X 以外の要素を排除する「網羅的」なものであり, 識別焦点 (identificational focus) と呼ばれる (このことに関して, 日本語のかき混ぜ句は識別焦点であるとする中村 2011 も参照)。

さて, 以上のことを背景として (2a, b) に戻ろう。ここにおいて, 話者 B の発話の後に, 「それと, 乃木坂も, 応援してる」を続け易いのは (2a) (2b) のどちらだろうか。判断は多少微妙だが, 筆者には, (2b) の方が続け易く感じる。(2a) の場合, 「それと, 乃木坂も, 応援してる。忘れてた」といった言い忘れでない限り, 乃木坂も含めることを B が意図しているならば, 「AKB と乃木坂を, あいつ, 応援してる」と言う筈である。この判断が正しいとすると, (2aB) での文頭句は識別焦点であるが, (2bB) での文頭句は識別焦点ではないと考えられる。(2aB) は AKB 以外を排除しており, (2bB) は AKB 以外を排除してはいない。つまり, (2aB) の文頭句は, 基本語順での目的語位置で情報焦点となるのを避けて, 網羅的識別焦点解釈を得るために, かき混ぜ操作によって文頭に移動されていると考えるのが自然であろう。それに対して, (2bB) の文頭句は, 談話主題として文頭に基底生成され, それと同一指示になるゼロ代名詞 (下記の (3b) での pro) が情報焦点として機能すると言えよう。

以上のことを図式化すると (3a, b) のようになる。

(3) a. 先行談話での Wh 句に解答を与えるタイプ

X は移動により派生する → X = 識別焦点

..... Wh_i

X_p [... t_i ...]

b. 先行談話で設定された談話主題を引き継ぐタイプ

X は基底生成される → X = 談話主題

..... X_i

X_p [... pro_i ...]

(3a) タイプに移動が関与し, (3b) タイプには移動が関与しないということは, 島が関わる構造によって立証される。節を改めてこのことを論じよう (日本語のかき混ぜ句に文頭に基底生

成されるものがあることは、依って立つ理論的立場が異なるものの、Bošković and Takahashi 1998でも論じられている)。⁵

3. 移動と基底生成

前節で挙げた (2a, b) のかき混ぜ句は、移動に関して異なった振る舞いを見せる。まず、(4) は、(2a) の焦点タイプである。

(4) a. 警察は、[テロリスト集団が何を保持しているという噂を] 聞き込んだんだって？

b.?? 生物兵器を、警察は、[彼らが持っているという噂を] 聞き込んだそうだ。

(5) a. 君は、[倉田君が、ヨーロッパ旅行中、どこで撮った写真が] 一番気に入ってる？

b.?? モンサンミッシェルで、僕は、[彼が撮った写真が] 一番好きだな。

(4) は [] 部分が同格節となるもので、(5) は [] 部分が関係節を構成するものであるが、いずれも複合名詞句の島となる構造である。この島の中から「生物兵器を」「モンサンミッシェルで」を主節頭にかき混ぜた (4b) (5b) は、どちらも非常に落ち着きが悪く、島の制約に起因すると思われる非容認性を示す。つまり、(4b) (5b) でのかき混ぜ句には移動が関わっているということである。⁶

次に、(2b) の談話主題タイプを見よう。(6) が同格節の島、(7) が関係節の島を含むものである。

(6) a. 田中が、[部長が無類のアイドル好きだという話を] してたらしいけど、ほんと？

b. うん、AKBのCDを、あいつ、[部長がタワレコで山ほど買ってたって話を] 確かにした。

(7) a. 先生は、ポスト印象派の中でも、[ゴッホが晩年に描いた絵が] お気に入りのようですね？

b. ええ、『アルルの跳ね橋』を、君も、[先生が絶賛しておられたご著書を] 読んでみましょう？

⁵ 本稿では「談話主題」という用語を使用するが、「話題」と呼ぶ方が正確かもしれない。主題 (X) とは、Aboutness 関係に基づき、その X「について」述べるものであるが、談話主題となり得るかき混ぜ句は、「タイから、松村が帰国したらしい」のように後置詞句でも可能である。しかし、「タイから」を提示し、後続部分でそれについて述べることは考え難い（後置詞句は「(純粹) 主題」にはならない。Cf. Saito 1985, Hoji 1985)。「タイ」について何かを述べることはできるが、「タイから」について述べることはできないのである。それにもかかわらず、上記の文に続けて「タイは、最近、政情が少し不安で、それで帰国したらしい」と言うことが可能である。つまり、「タイ」が談話の話題ということである。しかし、「話題」という用語には日常語的な曖昧性も感じられるため、以上のことを記した上で、「談話主題」という用語を引き続き使用することにしたい。

⁶ 一般に、同格節の島は関係節の島に比して島の制約が「弱い」と判断されるので、(4b) を「?」程度と判断する話者もいるかもしれない（筆者も、(5b) より (4b) の方が微妙によく感じる)。(4b) のかき混ぜ句が項 (目的語) であり、(5b) のかき混ぜ句が付加詞であることも、容認度に影響しているかもしれない。しかし、いずれにせよ、島の制約が機能しているとしてよいであろう。

長距離かき混ぜ操作は、かき混ぜ句と従属節の間に主節要素が介在するので、文解析に幾分か
の負担がかかる。そのため、(6b) (7b) を嫌う話者がいるかもしれない。しかし、そのような
話者でも、(4b) (5b) よりは響きがよいと判断するだろう。つまり、(6b) (7b) では島の制約
が顕現していないということである。とすれば、(6b) (7b) では移動が生じておらず、「かき
混ぜ句」は最初から文頭に基底生成されると考えるのが自然であろう（以下、かき混ぜが適用
されていない (3b) タイプでも、便宜上、X を「かき混ぜ句」と言う）。(3a, b) を再掲してお
こう。

- (3) a. 先行談話での Wh 句に解答を与えるタイプ

X は移動により派生する → X = 識別焦点

..... Wh_i

X_i [... t_i ...]

- b. 先行談話で設定された談話主題を引き継ぐタイプ

X は基底生成される → X = 談話主題

..... X_i

X_i [... pro_i ...]

上記のうち、(3a) タイプは、生成文法でのこれまでの研究で多くの知見が積み上げられてき
たものであるが、(3b) タイプは、ほとんど論じられてこなかったものである。そのことに鑑み、
以下では、かき混ぜ句が談話主題として機能するかき混ぜ操作文に特化して考察することにし
よう。なお、(3b) の表記では簡略化して示したが、2つ目の X は、1つ目の X と同じである
必要はなく、談話主題に関連して解釈可能でありさえすれば、言語形式が異なっても構わ
ない（そのような例を、後に (10) で見る）。

4. かき混ぜ句と談話主題

まず、一般的な傾向から見ていこう。(8) に見るように、先行する文脈に関係する成分は、次
の文の文頭に置かれ易い。

- (8) a. 山本さんが会費を滞納している人はすぐに除名するよという提案をした。

その提案に、みんなが反発して、会議が紛糾した。

- b. 登山道の両側は木が茂っていて何も見えなかったが、途中にとっても見晴らしのよい
展望台があった。そこのベンチで、私たちは昼食をとった。

(日本語記述文法研究会 (編) 2009: 165, 181)

(8a, b) の第2文は、(9a, b) のようにしても文法的には言えるのだが、談話 (テキスト) 的な
結束性効果が幾分弱まるのが感じられる。

- (9) a. みんながその提案に反発して、会議が紛糾した。

- b. 私たちはそこのベンチで昼食をとった。

以上の文例は、談話主題になる成分が、かき混ぜ文の文頭に置かれ易いことを示している。その位置が先行談話に近く、談話主題を引き継ぎ易いからである(砂川 2005 参照)。なお、かき混ぜ句の指示対象自体が先行談話になくても、談話の流れから主題性が保証できるものであればかき混ぜ句になり得る。(8b)でも、「展望台→そこにあるベンチ」という流れが見て取れるのだが、より複雑な推論が関わる例を見ておこう((10)は Hirota 2005 の例を参考にした)。

(10) 太郎は、今までに締切を守ったことがない。しかし今回は、論文を、その太郎が一月も前に提出した。

(10)において、前文の「締切」という表現から、「論文の締切」が話題になるのは自然な流れであり、その結果、「論文」が談話主題として提示されていると言えよう。

次に、その逆の状況を考えてみよう。Kuno (2008) は、述語や修飾語がかき混ぜ句になり難いという、非常に興味深い観察を行っている((11)の文例は筆者による)。

(11) a. * 愛しく、太郎は [_{sc} 花子を t] 思った。(小節 (SC) の述語)

b. * きれいな、太郎は [_{NP} t 家] に住んでいる。(修飾語)

(11a) は、小節(定形述語を有さない節)の述語「愛しく」をかき混ぜたものだが、「心から愛しく、太郎は、そのとき初めて [_{sc} 花子を t] 思った」のように、焦点解釈を強化しても完全に容認可能とはならない。一方(11b)では、修飾語が談話主題になり難いという要因と共に、名詞句(NP)が強い島を構成するという要因も機能しているのだろう。

以上の観察から Kuno (2008: 62) は、(12)の提案をした後、述語や修飾語がかき混ぜ操作の適用を受けないのは、それらが主語にならないからだとしている(下線は筆者による)。

(12) “Scrambling in Japanese is a syntactic operation that merges a maximal projection with a root constituent and turns that root constituent into a predicate at LF.”

(12)の言明中にある“a root constituent”(根構成素)というのはSのことであるが、(12)が従来の定式化と大きく異なるのは下線部である。この主張は、LF(意味解釈を行う部門)において、かき混ぜ句が併合された根構成素が(従来の言い方では、「かき混ぜ句が付加された元のSが」)、「述語」として書き換えられると規定している。そしてその結果、かき混ぜ句が「主語」として書き換えられるのである。例えば(13a)であれば、(13b)の意味を持つということである。

(13) a. [この本を], [ジョンが昨日、ハーバードブックストアで買った]。

主語

述語

b. This book is such that John bought it at Harvard Bookstore yesterday.

(Kuno 2008: 63)

ここにおいて、久野が主語としている構成素を「談話主題」、述語と呼んでいる構成素を「題述」と読み替えれば、(12)の主張の要点は、筆者の主張と発想的には同一であると言ってよいだろう。(13a)の「この本」が談話主題、「ジョンが…買った」が、それに対する題述

(comment) ということである。⁷

5. 談話主題と接続表現

当節では、かき混ぜ操作文と談話法の相関関係について、接続表現の観点から考察することにしよう（以下での、それぞれの接続表現の意味・用法については、日本語記述文法研究会（編）2009を参考にした）。

「へー」「そうなのか」「ほんとかよ」などの表現は、話し手が新しい情報を聞き、その情報を今まさに活性化したことを表す。次の文でのかき混ぜ句「アルファロメオを」「アメリカに」は、「へー」「ほんとかよ」によって活性化され、Aの発話からBの発話に引き継がれた談話主題である。このとき、「アルファロメオを」「アメリカに」をかき混ぜずに、元位置に残しても構わないのだが、「へー」「ほんとかよ」の果たす驚きの意味合いはかなり薄まるように感じられる。

(14) A：田中がアルファロメオ買ったんだよ、知ってた？

B：へー、アルファロメオを、あいつ買ったのか。アルファロメオって、安くても600万はするぞ。

(15) A：宏美がアメリカに留学するそうぞ。

B：ほんとかよ、アメリカに、宏美が留学？ あいつ、英語ぜんぜんできないよ。すなわち、「へー」「ほんとかよ」が、(14B)(15B)の発話におけるかき混ぜ操作の適用を誘発しているということである。

次に、「じゃあ」「すると」「そ（う）したら」などの接続表現は、ある事態が成立すると仮定して発話することを表す。(16)において、話者Aは、釣鐘饅頭が四天王寺の名物であることを知らないとしよう（「#」の表示は、文自体は非文法的ではないが、その文脈では適合しないことを示す）。

(16) A：こんど、初めて、四天王寺に行ってみようと思ってるんですよ。

B：# じゃあ、ぜひ釣鐘饅頭を、境内前の茶店で食べてみて下さい。

B：じゃあ、境内前の茶店で、ぜひ釣鐘饅頭を食べてみて下さい。

(16B)の発話における「じゃあ」は、「Aが四天王寺に行く」という事態が成立するのであればと仮定して、その後に話題を導入する表現である。すなわち、ここにおける「釣鐘饅頭」は、

⁷ Saito (1985) 以来、適正束縛条件違反に帰されることが通常であった (i) のような文も、談話主題の観点から説明可能であると思われる。

(i) *_{CP} 太郎が _{t_i} 殿つたと]_i, 花子を _i, ジョンがメアりに _{t_j} 言った。
紙幅の関係で、詳細については三原 (forthcoming) に委ねざるを得ないが、要点のみ示せば次のようになる。(i) が非文であるのは、[花子を] — [ジョンがメアりに言った] の部分が、談話主題—題述関係を構成するものではないからである。(i) の後半部分は、「花子について言えば、ジョンがメアりに言った」という意味関係をなしてはいないのである。なお付記すると、適正束縛条件は、さらに原理的な説明に還元すべきだという意見は以前からある。この点については、例えば、Hiraiwa (2010) を見られたい。

話者Bにとって新規に導入される情報である。ここでかき混ぜ文を用いると、AとBが親しい友人でもない場合、少なくとも筆者の耳には、談話の流れが微妙に押しつけがましくなるように感じられる（ただ、このような発話に「寛容」な話者もいるかと思われる）。そのように感じられる理由は、かき混ぜ句で示されているものが、AとBに共通して了解される談話主題として確立していないからであろう。他方、かき混ぜ文を用いない場合は、問題のない文である。

下記の(17)も(16)に類する例と言えらる。旅館の従業員がお客からの携帯電話の通話に答えている場面である。(17a)の第2文でも非文法的とは言えないのだが、旅館の従業員が客に言うこととしては、いささか唐突に聞こえるだろう。

(17) a. では、野々上町という停留所でバスをお降り下さい。# そうされましたら、「吉田屋」という小旗を、当館の者が持ってお待ちしております。

b. では、野々上町という停留所でバスをお降り下さい。そうされましたら、当館の者が「吉田屋」という小旗を持ってお待ちしております。

いささか唐突に聞こえる理由は、(16)の文例と同様に、事態の成立を仮定して発話することを表す「そうされましたら」にあると思われる。ここにおいて、「「吉田屋」という小旗」は客にとって初出の情報であり、談話主題として確立していないのである。

先行談話で述べられた内容を中断して、それに反する内容の発話を行う場合、かき混ぜ文を用い難いのも談話主題の要因によると言えよう。意外性を意味する「ところが」「それが」で確認してみよう。

(18) A：康介の撮り鉄熱、尋常じゃないよな。

B：# ところが、寄席通い、あいつ突然始めたんだよ、この格差！

B：ところが、あいつ突然、寄席通い始めたんだよ、この格差！

(19) A：実験、もう終わりましたか？

B：# それが、娘さんを、田中君が、急病で病院に連れて行って…少し遅れます。

B：それが、田中君が、娘さんを急病で病院に連れて行って…少し遅れます。

AとBの発話の間に、いわば「断絶」があることにより、「寄席通い」「娘さん」が談話主題になり難いことを確認されたい。

(18)(19)と同様の現象は、話題の転換を表す「ところで」「さて」「それにしても」などでも観察される。(20)では、A/Bの話者とも、田中君が店の経営者であることは知っているが、その店のことは現行の談話では話題になっていないとしよう。

(20) A：今年のGWはずっと晴れみたいだな。

B：そうだな。# あ、ところで、店を、田中君がGWの間に閉店するそうだよ。

B：そうだな。あ、ところで、田中君がGWの間に店を閉店するそうだよ。

(21) A: 本学には、文学部、理工学部、体育学部などの他、全部で8つの学部があります。

B: # たいしたものですねえ。それにしても、優秀なアスリートを、貴学の体育学部がたくさん輩出しているのは、何か理由があるのですか？

B: たいしたものですねえ。それにしても、貴学の体育学部が優秀なアスリートをたくさん輩出しているのは、何か理由があるのですか？

(20) (21) においてかき混ぜ文を用い難い理由は、話し手が話題を転換するとき、聞き手は新たな話題を知らないことが多いので、談話主題としてのかき混ぜ句を設定し難いからであろう。

当節では、かき混ぜ句が談話主題であるかき混ぜ文と、接続表現の意味タイプの間に相関関係があることを実証した。次節では、文法と談話の関係についての機能構文論の見解を見た後、本稿での検証結果を実例でも確認することにしよう。

6. 談話の地平へ

本稿で見てきたことの基盤をなす直観は、「マンションを、太郎が買った」のような文は、先行文脈（あるいは先行状況）のない環境では発話されないということであり、かき混ぜ句「マンション」と何らかの意味で関連する要素が、先行談話中に存在するということである。かき混ぜ操作のように、ある種の強調のために語順を変更する構文が、談話構造の影響を受けるのは当然のことであると思われるが、「はじめに」で記したように、談話の観点からかき混ぜ操作を分析した論考は、生成文法の枠組みでは見当たらない。

他方、機能構文論の立場を取る高見（2001: 142）には、(22) を題材として、かき混ぜ文と談話の絡みについての言及がある。

(22) 太郎はリンゴを何個食べたの？

a. 太郎はリンゴを3個食べたよ。

b. 3個、太郎はリンゴを食べたよ。

(22a) の「3個」は、動詞直前要素なので（情報）焦点として解釈されるが、(22a) と知的同義である (22b) が適格なことから、(22b) での「3個」も焦点機能を果たしている。

かき混ぜ文に関して、高見（2001: 143）が抽出した原則は (23) である。

(23) かき混ぜ規則により文頭に移動した要素は、有標焦点として解釈され、文中で最も重要な情報を伝達する。

高見が有標焦点 (marked focus) と言っているのは、独立した文としては (22b) が稀であることと、(22b) が統語的手段（かき混ぜ操作）による派生であることによる（有標焦点は、É. Kiss 1998 の識別焦点に相当すると思われる）。ここで筆者は、(22b) での「3個」が、先行文脈中の「何個」と照応していることに注目したい。もちろん、(22a) でも照応関係は成り立っているのだが、(22b) の方が、談話的結束性がより強く感じられる。すなわち、かき混ぜ句は、先行文脈中に存する要素と強い照応関係を担うということである。かき混ぜ操作文と談話構造

の関連については、Kuno and Takami (1993) にも記述がある。

なお、念のため付記しておくが、高見の (22b) の例は、かき混ぜ句が焦点として機能するタイプであるが、上で述べた「談話的結束性」は、かき混ぜ句が談話主題として機能するタイプにも、当然ながら当てはまるものである。

さて、本稿で検証してきたことを、最後に、事例でも確認することにしよう。(24) (25) は林真理子『短編集』から収集した例である。(24) は、かき混ぜ句に「これ」「それ」といった指示詞が付いているもので、この指示詞は、明らかに先行談話要素と照応関係を担っている。一方 (25) は、かき混ぜ句が先行談話中の要素と何らかの関連性を持つものである。事例を集めてみると、この2つのタイプのかき混ぜ文が非常に多いことが分かる。

(24) a. 淳子は突然、発作のようなせつなさが押し寄せてきて、思わず幼女を抱きしめた。おかつぱ頭に頬を埋めると、強い耳垢のにおいがした。これとは全く違う体臭を持つ人間のことを、淳子は思い出している。

b. 五メートルほどの前を泳いでいる足のたてる水泡が、ゆっくりとこちらに漂ってくる。それを水死体のように、ただからだを浮かしながら美和子は見る。

(25) a. 青と黄色の花模様のパジャマが、畳んで置かれている。淳子が高校時代に使っていたものはなんでも、静代がきちんととっておいてくれる。

b. その日の体調や気温によっても違う。もし大瓶を開けて、飲み切れなかったらもったいない。中瓶も用意するようにと男は言うのだ。

(三原・平岩 2006:110)

(25a) での下線部における「なんでも」は、「青と黄色の花模様のパジャマ」と関連しているし、(25b) の「中瓶」も「(ビールの) 大瓶」と関連するものである。かき混ぜ句が先行談話要素と関連することは、事例からも確認されるのである。

参考文献

- 天野みどり (1998) 「前提・焦点」構造からみた「は」と「が」の機能』『日本語科学』3.
- Bošković, Željko and Daiko Takahashi (1998) Scrambling and Last Resort. *Linguistic Inquiry* 29 (3).
- É. Kiss, Katalin (1998) Identificational Focus Versus Information Focus. *Language* 74 (2).
- Hiraiwa, Ken (2010) Scrambling to the Edge. *Syntax* 13 (2).
- Hirota, Taichi (2005) On Japanese Scrambling and Its Focus Relations. *Tsukuba English Studies* Vol.24.
- Hoji, Hajime (1985) *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*. Doctoral Dissertation. University of Washington.
- 堀川智也 (2012) 『日本語の「主題」』ひつじ書房.
- Kuno, Masakazu (2008) Scrambling in Japanese as Pure Merge. *Linguistic Research* 19. University of Tokyo.
- Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami (1993) *Grammar and Discourse Principles*. University of Chicago Press.
- 三原健一 (2022) 『日本語構文大全 II』くろしお出版.

- 三原健一 (forthcoming) 『日本語構文大全 III』 くろしお出版.
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造』 松柏社.
- 中村浩一郎 (2011) 「トピックと焦点: 「は」と 「かき混ぜ要素」の構造と意味機能」長谷川信子 (編) 『70年代生成文法再認識』 開拓社.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法 7』 くろしお出版.
- Saito, Mamoru (1985) *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*. Doctoral Dissertation. MIT.
- Saito, Mamoru (1989) Scrambling as Semantically Vacuous A'-Movement. In M. Baltin and A. Kroch (eds.) *Alternative Conceptions of Phrase Structure*. University of Chicago Press.
- Saito, Mamoru (1992) Long Distance Scrambling in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 1 (1).
- Schegloff, Emanuel A. and Harvey Saks (1973) Opening Up Closings. *Semiotica* 8.
- 砂川有里子 (2005) 『文法と談話の接点』 くろしお出版.
- 高見健一 (2001) 『日英語の機能的構文分析』 鳳書房.

